様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：８２７２３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｋ１６７７９

研究課題名（和文）フレイジオロジーに基づく現代英語の脱文法化現象解明の記述的研究

研究課題名（英文）Descriptive approach to clarifying the degrammaticalization of newly-observed phraseological units in contemporary English

研究代表者
井上　亜依（Inoue, Ai）

防衛大学校（総合教育学群、人文社会科学群、応用科学群、電気情報学群及びシステム工・総合教育学群・准教授

研究者番号：７０４４１８８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は、次の2点である。①現代英語を集めた言語資料収集体（コーパス）を用いて現代英語に観察される観察される平易な単語から成り立つ新しいフレーズの実態を実証的に述べた。②その新しいフレーズの脱文法化（前置詞などの機能語が動詞のように内容語へ変化すること）現象とその脱文法化への発展順序を解明した。この2点を明らかにすることにより、フレーズの研究（フレイジオロジー）と近年注目を浴びている脱文法化の発展に貢献し、新たな視点からフレイジオロジーに取り組み、その発展に貢献した。

研究成果の概要（英文）：The research showed the following two results: (i) the actual features of newly-observed phraseological units (consisting of at least two words, hence PUs) in contemporary English obtained from data from corpora through descriptive approach; and (ii) the newly-observed PUs undergo degrammaticalization (i.e., the phenomenon which a function word changes into a content word) and the cline how they behave like a content word from a function word. It has been widely accepted that degrammaticalization occurs in words. However, no research to date has dealt with the application of degrammaticalization to PUs. By clarifying the two results, the research contributed to the development of phraseology (i.e., the study of PUs) and degrammaticalization.

研究分野：英語学

キーワード：フレイジオロジー　フレーズ　脱文法化

１．研究開始当初の背景

これまでの言語理論によると、人間は単語と文法規則の習得により無限に文を生成する能力があると考えられてきた。しかしながら、人間が実際に作文・発話したものに注目すると、文法規則では説明できない語と語の塊、あらかじめ固定化された塊、すなわちフレーズ(phrase)が多数使用されていることがわかる。このようなフレーズを多数使用することにより、言語らしさをもった作文、発話が可能となる。

この人間の言語の根幹をなすと考えられているフレーズを研究する学問であるフレイジオロジーは、電子言語資料収集体（コーパス）の発展に伴い過去 20 数年間に注目を浴び、実践的側面が進んだ学問である。このため、フレーズの定義、その研究手法などの理論的側面は各研究者により異なり、発達段階中である。

このような状況の中、筆者は繰り返し使用されるがこれまでの文法規則の説明を超えたフレーズの実態解明の実証的研究を行ってきた。そのようなフレーズは、馴染みのある機能語から構成されており文脈で内容語のように振る舞うことがある。このような機能語が内容語に振る舞う現象を脱文法化という。脱文法化現象は、単語の場合にのみ起こるとこれまで考えられてきており、また脱文法化への過程は明らかになっていない。

上記の背景のもと、次々と観察される新しいフレーズの実態解明とフレーズの脱文法化の実態解明をする必要がある。

２．研究の目的

(1) これまでの先行研究では述べられていない文法的機能のみを持つ機能語から成り立つ新しいフレーズの実態を、現代英語の電子言語資料収集体の用例を分析することで調べる。

(2) 実態が明らかになった新しいフレーズが、語彙的意味を持つ内容語へ変化する脱文法化現象を起こしていることを、意味論と統語論の観点より検証する。

(3) 脱文法化を起こしているフレーズが、どのような過程を経て脱文法化に至ったのかを提示する。

３．研究の方法

研究の目的(1)，(2)，(3)を達成するために、下記に示す 6 つの研究手法を採用した。(1)，(2)，(3)，(4)は研究の目的(1)を達成するため、(5)，(6)は研究の目的(2)と(3)を達成するための研究手法である。

(1) 現代英語に観察される機能語から成り立つフレーズを選定し、現代英語の電子言語資料収集体を用いて、そのフレーズの使用頻度を調べる。

(2) 新しいフレーズの意味と文脈での役割を、電子言語資料収集体の用例より明らかにする。

(3) 新しいフレーズがいつごろから使用され始めたのかを言語の使用変遷を追うことが可能な歴史的電子言語資料収集体を用いて調べ、どのようにして新しい意味を獲得したか調べる。

(4) 新しいフレーズの形成をこれまでの語形成の形成規則（複合、派生、借用、転換、頭文字語、逆形成、省略、混交、句の語彙化、異分析、語根想像）を活用し説明する。

(5) 新しいフレーズが脱文法化を起こしているかどうかを検証するために、どのような内容語で置き換えることができるかという置換テストを英語母語話者に行う。

(6) 研究手法(2)から(5)で得られた結果に基づき、脱文法化とは反対の現象である文法化（内容語が機能語化すること）の方向付けを参考にしながら、新しいフレーズの脱文法化への方向付けを行う。

４．研究成果

(1) 研究手法(1)，(2)，(3)，(4)を活用して機能語から成り立つフレーズ（until to/ up until to, in and of, be on against, be in and out, be in to, though A but B, not A though A’ but B, not only A though A’ but B, from A until to B, 本研究では be 動詞は機能語とする）の実態を電子言語資料収集体からの用例をもとに、明らかにした結果は次の通りである。

①各フレーズの文中での位置、特徴的な共起語句の統合的特徴から各フレーズは独自の意味と機能を持っていた。

②歴史的言語資料収集体を使用して、本研究で扱ったフレーズがいつごろから使用され始めたのか調べたところ、主に現代英語（1900 年以降）になって活発に使用され始めていたが、現代に近づくにつれて使用が増えていた。

③本研究で扱ったフレーズは、語形成過程のうち複合、省略、混交、異分析、逆形成を応用して成り立っているもの、倒置、短縮という言語一般的な規則を用いて成り立っているもの、類推と融合という意味を重視した規則により成り立っている、という 3 タイプが認められた。フレーズの形成については、語形成過程では生産性の高い過程（複合、派生、転換、頭文字語）が必ずしも採用されるわけではなく、フレーズ独自の形成方法を確立していることがわかった。

④上記の研究成果は、フレーズの意味、機能、形成方法を明らかにした研究はこれまでされておらず、フレーズの働きや存在に科学的根拠を与えた。

(2) 研究の手法(5), (6)をもとに、本研究で扱った機能語から成立するフレーズがどのように脱文法化を生じされているかどうかを、定義、過程、種類、判断条件、置換テストから明らかにした。

①脱文法化の定義は、一般的に「ある特定の文脈において、文法的形態素が１つ以上の言語学的レベル（意味論、形態論、統語論、音韻論）で自主性もしくは実体を増す複合的変化を起こす」というもので、本研究で扱った全てのフレーズは、意味論、形態論、統語論という３つの言語的レベルで複合的変化を起こしているという点で脱文法化の定義を満たしている。とりわけ本研究で扱ったフレーズは、これまでの単語レベルで観察された脱文法化とは異なり、文脈上そのフレーズが存在しないと意味解釈に支障をきたすという点で、意味の観点から脱文法化を生じさせていることをも述べた。これは、フレーズに観察される特徴的な脱文法化と言える。

②フレーズの脱文法化への過程は、文法化現象の詳細な過程（内容項目 -> 文法的用語 -> 接語 -> 屈折接辞）をすべてたどる必要があるという一方向性ではなく、文法的語 -> 内容項目という 1 過程を経ていることを明らかにした。この過程をすべてたどる必要がない不連続性は、脱文法化の特徴の１つと言える。特にフレーズの場合は、その構成要素が一様でないことがあるため、フレーズ全体としての働きを精査することにより脱文法化を生じさせているかどうかを判断する必要があるため不連続性という特徴を持つことをも述べた。

③②で述べた過程は、機能語から内容語へ変化しているフレーズが、脱文法化の２種類(第一次脱文法化（機能語が完全な語彙項目になること）と第二次脱文法化（拘束形態素がより文法的でないものになること)）のうち、第一次文法化の機能語が完全な語彙項目になるという degrammation に分類されることを述べた。この degrammation は、脱文法化の種類のうち最も観察されない現象であることから、フレーズにのみ観察される特徴的な脱文法化の種類であることを明らかにした。

④機能語から内容語へ変化しているフレーズが脱文法化を生じさせているかどうかの判断基準は、脱文法化の判断基準とされている６つ(integrity(完全性)、paradigmaticity（系列性)、paradigmatic variability（系列的変動)、structural scope(構造的範囲)、boundness（接着性）、syntagmatic variability（統合的変動)）のうちの 2 つ integrity と paradigmaticity という基準を満たしていることを明らかにした。

⑤本研究で扱ったフレーズが理論面だけでなく、実践的側面からも脱文法化現象を生じさせているかどうかを、英語母語話者に各フレーズの意味に匹敵する内容語に置換した英文が正しいかどうか判断してもらった。その結果、どの英語母語話者も内容語に置換した英文で問題ないとの結果を得た。このことから、機能語から成り立つフレーズは、脱文法化現象を生じさせていることを、理論的側面と実践的側面から明らかにした。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① Inoue, A. An eclectic phraseological research on the formation and degrammaticalization of phraseological units, *International Journal of English Linguistics*, 査読有, Vol.6, No.4, 2016, 1-11, DOI:10.5539/ijel.v6n4p1

② Inoue, A. A phraseological approach to the shift between subjunctives from *were* to *was*: The case of *as it were* and *as it was*, *International Journal of English Linguistics*, 査読有, Vol.5, No.5, 2015, 14-23, DOI: 10.5539/ijel.v5n5p14

③ Inoue, A. A diachronic and synchronic study of the alteration of uniform expressions from *those who* to *those that*, *International Journal of English Language and Linguistic Research*, 査読有, Vol.3, No.3, 2015, 28-50, http://www.eajournals.org/journals/international-journal-of-english-language-and-linguistics-research-ijellr/vol-3issue-3-may-2015/a-diachronic-and-synchronic-study-of-the-alteration-of-uniform-expressions-from-those-who-to-those-that/

〔学会発表〕（計８件）

①井上亜依、名詞として働く疑問詞－the/ a why を中心に、日本英語コミュニケーション学会第 25 回年次大会、2016 年 10 月 29 日、早稲田大学（東京都・新宿区）

②井上亜依、the/ a why の実態、フレイジオロジー研究会第 13 回例会、2016 年 9 月 17

日、関西学院大学梅田キャンパス（大阪府・大阪市）

③井上亜依、フレイジオロジーの立場から日本の英語教育を考える、関西英語語法文法研究会第 32 回、2016 年 7 月 9 日、関西学院大学西宮キャンパス（兵庫県・西宮市）

④井上亜依、イディオモロジーからフレイジオロジーへ、フレイジオロジー研究会第 12 回例会、2016 年 3 月 12 日、関西学院大学梅田キャンパス（大阪府・大阪市）

⑤井上亜依、定型表現研究の体系化を目指して－形態論・音響音声学の観点から、フレイジオロジー研究会第 12 回例会、2016 年 3 月 12 日、関西学院大学梅田キャンパス（大阪府・大阪市）

⑥Inoue, A. A phraseological approach to the shift from the were-subjunctive to the was-subjunctive: Examples of ‘as it were' and ‘as it was', Corpus Linguistics, 2015 年 7 月 21 日、Lancaster University (Lancaster (United Kingdom))

⑦井上亜依、定型表現の形成過程と脱文法化への過程、関西英語語法文法研究会第 30 回例会、2015 年 7 月 11 日、関西学院大学西宮キャンパス（兵庫県・西宮市）

⑧Inoue, A. A diachronic and synchronic research on the changing of uniformed expressions from *those who* to *those that*, 20th Dictionary Society of North America and 9th International Conference on Studies in the History of the English Language, 2015 年 6 月 5 日、University of British Columbia, (Vancouver (Canada))

〔図書〕（計１件）

①八木克正、神崎高明、井上亜依、住吉誠、岩波書店、熟語本位英和中辞典　新版、2016、2000

６．研究組織

(1)研究代表者

井上　亜依（INOUE, Ai）
防衛大学校・総合教育学群外国語教育室・准教授
研究者番号：７０４４１８８９